

Bhāsa の戯曲に見る仏教徒について

野 部 了 衆

ここに言う Bhāsa の戯曲とは 1909 年に Gaṇapati Śāstri が Travancore で発見¹⁾した古写本を Bhāsa の作品と推定して Trivandrum Skt. 叢書に収め出版した 13 の戯曲のうちに含まれる Avimāraka (Avi.), Pratiññāyugandharāyaṇa (Prat.), Cārudatta (Cār.) の 3 である。本稿では、これらの作品に作者が仏教徒を如何に処理してあるか、またそれに付随する問題を少し考察してみたい。仮りに、これらの戯曲が Bhāsa の真作でなかったとしても、それは現存し、そこには作品の成立した頃の或る種の視点が処理されていると解することは不可能なことではない。それゆえ、ここでは伝統説を踏まえると共に作品の成立した頃の仏教徒の側面の幾らかを作品中から拾い進めて行こう。

I 戯曲作家 Bhāsa の名は Kālidāsa や Bāṇabhaṭṭa の作品に紹介されて²⁾あり、その才能は早くから知られていた。しかし、彼の作品が具体的に示されたのは Gaṇapati Śāstri による作品の公開以後で³⁾ある。この発見された戯曲には作者の記銘がなく、先学諸師の研究成果に依つても、Bhāsa の真作か否かについて、確かな見解は出されていない。また Bhāsa については Viṣṇu 殊に Kṛṣṇa 崇拝者であつたことを除いて不明である。彼の在世年についての学説 1 つを拾つても B. C. 6~A. D. 11 世紀に亘つてうんぬんされ⁴⁾、A. D. Pusalker は、詳細な研究・検討の結果、新しく見ても Maurya 王朝以前の在世ではなからうかとして⁵⁾いる。いま、辻博士の説に従えば、Trivandrum の戯曲はほぼ A. D. 300~350 年頃の成立⁶⁾とされ、その頃にその作者の在世年を設け得るであろう。

II これまでに Kālidāsa, Bhavabhūti, Kṛṣṇamiśra の作品に処理する仏教徒

1) A. D. Pusalker: Bhāsa-A Study, Delhi, 1968. p. 2.

2) C. R. Devadhar: Malavikāgnimitra of Kālidāsa, Delhi, 1966, p. 2. P. V. Kane: The Harshacarita of Banabhatta, Delhi, 1973, p. 2. I-Verse 15.

3) C. R. Devadhar: Plays ascribed to Bhāsa (P. O. S. 54), Poona, 1962, Intro. p. iv.; P. V. Kane's, Notes On, p. 12.

4) A. D. Pusalker's, p. 63.

5) ibid. p. 84.

6) 辻直四郎; サンスクリット文学史, 東京, 1973, p. 24.

に関して少し触れる機会を持った⁷⁾が、Bhāsa の戯曲 *Avi.*, *Prat.*, *Cār.* では仏教徒を如何に処理してあるであろうか。

i) *Avi.* は全 6 幕から成るもので、第 5 幕に主人公 *Avimāraka* の友達である道化の言葉の中に仏教僧の身なりに関するものがある。恋する *Kuraṅgī* と *Avimāraka* の 2 人だけの再会の場所から道化を引き離す試みを *Kuraṅgī* の侍女の *Nalinikā* がする。それに応答する叙述の中に、「私は〔左肩から右腋へ〕浄紐を掛けているから婆羅門であり、ぼろ布の托鉢衣を纏っているから赤色衣者(仏教僧)であります。もしも私が衣をぬぎ捨てるならば、裸の修行者(耆那)であります」⁸⁾とある。彼、道化の身につけているものが婆羅門、仏教僧、耆那の行者の各々の外見的証拠となり得るものである。また *Avimāraka* は *Sauvīra* 国の王子という設定であり、窮つた見方を許すならば、この叙述は、この地方の婆羅門、仏教僧、耆那の行者の混合程度を意味しているのかも知れない。

ii) *Prat.* は全 4 幕から成り、第 3 幕に仏教僧の格好をした者が登場する。この物語の骨子は *Ujjayinī* の王 *Pradyota* のもとに捕えられた *Vatsa* の王 *Udayana* の救出を、彼の大臣 *Yaugandharāyaṇa* を中心とする部下一同が試みるというものである。この試みは各自が変装して敵地へまぎれ込み、情報収集、画策活動をするに始まる。*Vatsa* の王の大臣、知将の彼は気狂いに、王の友達である道化は乞食に、もう 1 人の大臣 *Rūmaṇvān* は仏教僧に変装して *Ujjayinī* へ潜入する。ここに、作者によつて描き出された仏教僧は呪詛を用いるものとして処理し、また「私の威神力をご覧なされよ」⁹⁾という言葉を語らせ、威神力の所有者とされてある。作者が敢えて仏教僧に変装させて *Ujjayinī* に潜入させるという意図的手段について考察するならば、当時、よそ者が人目につかない程に、この都に仏教僧が往来し、活動していたことを示唆するものとも伺い得る。

iii) *Cār.* は全 4 幕から成る作品である。この作品は後世の *Śūdraka* 作とされ

7) 拙論「戯曲 *Malavikāgnimitra* に登場する一端役 *parivrājikā* について」、龍谷大仏教学会編『仏教学研究』第 24 号, pp. 49-55; 「*Malatimādhavam* における尼僧 *Kāmandakī* について」、印仏学会編『印度学仏教学研究』第 21 巻第 1 号, pp. 389-393; 「*Prabodhacandrodaya* について」、印仏学会編『印度学仏教学研究』第 23 第 2 号, pp. 194-198.

8) C. R. Devadhar's ed., p. 169. *yajñopavitena brāhmaṇaḥ, cīvareṇa raktapaṭaḥ/ yadi vastram apanayāmi śramaṇako bhavāmi/*

9) *ibid.* p. 87...../ *yadi na niryātayasi, tvāṁ śapāmi/; brāhmaṇopāsaka! pre-kṣasva prekṣasva mama prabhāvam/*

る戯曲 *Mṛcchakaṭika* (*Mṛc.*) の前 4 幕に相当する骨組みを有するものである。*Mṛc.* の場合、按摩が仏教僧になることを第 2 幕において「私は釈迦流の沙門になります」¹⁰⁾と明らかにしてあるが、*Cār.* では見当らない。按摩は *Pāṭaliputra* の商家の生まれ。盛衰の憂き目に遇い、按摩になり、*Ujjayinī* へやつて来て、若くて素晴らしい商人 *Cārudatta* の下で職を得たが、彼も他人への過度の施与から食乏に迫られ、ついに彼のもとを退いたけれども、自分の技術を *Cārudatta* 以外の者に施して生計を立てることをよしとせず、贈博に出入りし、負債に悩まされ、借金の取り立て人に追われて逃げ込んだところが *Cārudatta* の恋人の *Vasantasenā* の住居。事情を知った彼女は借金の肩替りをして返済してやる。彼は、彼女の下で働きたい意志を表明したが辞退され、出家を決意するというのが *Cār.* における按摩の出家する過程であり、仏教僧になるという決意は明記されていない。すなわち、「[世間に] うんざりした私は、今日こそ出家致します」¹¹⁾ という言葉を見出すのみである。

この作品 *Cār* の中で、作者が仏教僧すなわち釈迦流の沙門と名差しの言葉で述べる部分が 1 箇所ある。*Vasantasenā* からの預かり品である宝石箱の保管に気を奪われて眠れぬ状態にある夜を語る道化の言葉の中に、作者の目に映ったその当時の仏教僧の行状の一端を伺う。すなわち「私はまったく、遂行さるべき女との密会の約束をしてある釈迦流の沙門のように、眠りに着けませんわい」¹²⁾ とある。ここにおける叙述は、作者が道化の言葉で処理しており、物語に滑けい味を含ませるためのものであると解することは勿論のこと、そこに組み込まれた仏教僧の行状に対する批判的意図も見逃がし得ない。ちなみに、この叙述に相当する部分を *Śūdraka* 作の *Mṛc.* の中には発見でき得ない。彼の作品にその部分が削除されてあることは、その部分が、*Car.* の中で、作者によつて如何程にか意識的に採り上げられているものであるかを理解するために時間を要さない。

さらにまた、この叙述部分に関連させて、A. D. Pusalker は、当時の仏教僧の低俗な道徳的感覚に対する批判であると説明・解釈しており、加えて、作者が、これらの戯曲中に仏教を引き合いに出してある叙述部分は、インドにおける初期

10) M. Gosvami ed.: *Mṛcchakaṭikam* (H. S. G. 252), Varanasi, 1962.śakyaśramaṇako bhaviṣyāmi/

11) C. R. Devadhar's ed., p. 220. adyaiva kadācin nirvedena pravrajeyam/

12) C. R. Devadhar's ed., p. 228. ahaṁ khalu tāvat kartavyakarastrikṛtasaṅketā iva śakyaśramaṇako nidrām na labhe/

13) A. D. Pusalker's. pp. 432-433.

仏教を正確に述べているとして、彼自身の Trivandrum 戯曲の成立年代の想定とのかかわりを思わせる見解を、その著書の中¹³⁾で述べてある。ともあれ、この

戯曲 Cār. における仏教僧の行状に比喩した叙述部分には、その当時の仏徒集団における教法と、その実践生活における教法の運用においての貞操観念の欠落に起因する行為に対する批判であつたであろうことは否定でき得ないであろう。

Ⅲ Bhāsa の作品とは別であるが、かつて仏教徒集団に加わっていた経験を有する人物を登場させてある Skt. 文学作品。Bodhāyaṇa 作の Bhagavadajjukīya¹⁴⁾がある。この作品の初めの部分に、その男の仏教徒集団への入・退団の動機理由について述べてある。それによれば、当の本人の家柄は婆羅門。とは言え満足に食にありつけない程の家の貧しさ。朝飯の欲しさに、釈迦流の沙門になったが、そこではよからぬ素姓の連中が日に一度しか喰わないでいるし、それでは腹がもたないので暇乞いしたという記述がある。そのように述べる男は、この作品中では、行者の弟子として頑張っている人物として処理されてある。このような状態での仏教徒集団への参加者の存在していたであろうことは否定でき得ない。なぜならば、それは、仏教伝播の歴史的過程を振り返れば想像に難くない要素でもある。また、それは仏教徒集団の乱れを律する戒律の整備の内側を問えば、自明のところとなるかも知れない。このように考察するとき、戯曲 Cār. の第3幕における叙述の部分の件に対しても、状況としては幾らかの類推が可能になり得る。

Ⅳ 上述して来た Avi., Prat., Cār. に見られる地名¹⁵⁾は Gaṅgā と Narmadā の流域にあり、その辺の仏教徒集団の行状がうんぬんされているのかも知れない。また、これらの戯曲の作者は、既述からも知るように、主人公たちの日常的・精神的支えとして仏教を処理しては居らず、異教と見做し、単に物語の進展のための諸事象における演繹の手段的処理に用いてある。従つてこれらの作品中に見出すところの作者の目に映つた仏教徒集団活動における諸矛盾について論じる場合、そうした諸矛盾は、生身の人間が存在する限り、常に付随する問題である。それゆえ、その諸矛盾が、仏教の発展の時間的経過を示す唯一の必然的要素であるかのように解して、それが時代的把握の鍵であると見做す見解には、いまだ若干の無理な部分を含んでいるであろうか。

14) C. C. Mehta tr.: Three Sanskrit Lighter Delights, Baroda, 1969. pp. 1-26.; 小林信彦訳; 笑劇遊女上人『日印文化』特集号 1 (1960). pp. 63-79.; S. C. Banerji: A companion to Skt. Literature, Delhi, 1971. p. 27.;

15) Pāṭalīputra, Vārāṇasī, Vairantya, Vatsa, Ujjayinī, Sauvīra.